福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

マゾヒズムとサディズムについて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-01-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂田, 登 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/9524

マゾヒズムとサディズムについて

坂　田　　登*

あのカトリシズムの私生児ともいうべきサディズム・・・このまことに奇妙な、まことに定義しにくいサディズムなる状態は、実際、無信仰者の魂においては起こり得ない状態である。それは単に血なまぐさい暴力によって欲望を掻き立てて、肉の放蕩三昧にふけるだけでは成立し得ないのである。なぜかと言うに、そうした場合はただ生殖の感覚が錯乱するだけであって、それは一種の極端な老熟に達した淫乱症の症例にすぎないからだ。そうではなくて、サディズムは何よりもまず、涜聖の実行、道徳的叛逆、精神的放蕩、完全に観念的でキリスト教的な錯乱のうちにこそ存するのである。

ユイスマン『さかしま』第12章[1]

またヴァレリイの言葉にあるような、ユイスマンの悲惨なものに対する異常な関心ないし尊敬も、醇乎たる中世キリスト教的な伝統の裡にあるものと称してよい。中世紀に行われた極端な宗教的な愛の恍惚は、王女たちが癩患者の悪臭を放つ傷口に接吻して、わざと病毒に感染し、それによって生じた潰瘍を彼女たちの薔薇と呼んだほどであった。それは殉教の宗教的マゾヒズムと言ってもよい。ユイスマン晩年の小説『スキエダムの聖女』は、そのようなマゾヒスティックな聖女伝説の物語である。

澁澤龍彦によるユイスマン『さかしま』のあとがき[2]

---

*福井大学教育地域科学部社会系教育講座

[1] ユイスマン『さかしま』澁澤龍彦訳、桃源社、1962、pp.228~229

[2] 同、p.393

ドナティアン・アルフォンス・フランソワ・ド・サドとレオポルト・フォン・ザッヘル・マゾッホという二人の作家の名前をもとにサディズムとマゾヒズムという用語を創り出したのは精神医学者リヒャルト・フォン・クラフト・エビングである。[3] そしてこのサディズムとマゾヒズムという用語はそれ以来、性倒錯（paraphilia）の一症状を示すものとして用いられている。しかし、西洋のキリスト教的文化と道徳の中でサディズム及びマゾヒズムと呼ばれるもの、また特に二人の作家においてみられるそれは単なる性倒錯以上の意味を持つものとも思われる。そこで、ここではまずDSM-5におけるこれらの症状についての説明、そしてこれまでサディズムとマゾヒズムについての基本的な理解の仕方を提供してきたフロイトのマゾヒズム論を論じてみたい。

まず、DSM-5（精神疾患の診断・統計マニュアル）[4]においてサディズム及びマゾヒズムはどのようなものとして説明されているのか確かめてみたい。ここでは、窃視障害、露出障害、窃触障害、小児性愛障害、フェティシズム障害、異性装障害などと並んで性的マゾヒズム障害と性的サディズム障害がパラフィリア障害群（Paraphilic Disorders）に属するものとして挙げられている。まず性的マゾヒズム障害（Sexual Masochism Disorder）の診断基準とは次のようなものである。A. 少なくとも６カ月間にわたり、辱められる、打たれる、縛られる、またそれ以外の苦痛を受ける行為から得られる反復性の強烈な性的興奮が、空想、衝動、または行為に現れる。B. その空想、性的衝動、または行為は、臨床的に意味のある苦痛、または社会的、職業的、または他の重要な領域における機能の障害を引き起こしている。そして性的サディズム障害（Sexual Sadism Disorder）の診断基準とは次のようなものである。A. 少なくとも６カ月間にわたり、他者への身体的または心理的苦痛から得られる反復性の強烈な性的興奮が、空想、衝動、または行動に現れる。B. 同意していない者に対してこれらの性的衝動を実行に移したことがある。またはその性的衝動や空想のために臨床的に意味のある苦痛、または社会的、職業的、または他の重要な領域における機能の障害を引き起こしている。尚、それぞれの基準Ａではパラフィリアの質的特質が規定され、基準Ｂではパラフィリアがもたらす悪影響（すなわち、苦痛、障害、または他者に対する危害）が規定されている。そしてその人が障害という診断を受けるのは基準ＡとＢの両方を満たす場合のみであり、満たしているのが基準Ａのみの場合、その人はマゾヒストまたはサディストであるがそれが障害とはなっていない、あるいは良性の、即ち自分にも他者にも悪影響または害を及ぼすことのない、マゾヒストまたはサディストであると言える。[5] しかし、このよ

---

[3] Donatien Alphonse François de Sade (1740~1814)
Leopold Ritter von Sacher-Masoch (1836~1895)
Richard Freiherr von Krafft-Ebing (1840~1902)

[4] Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fifth Edition, American Psychiatric Association, 2013
『DSM-5精神疾患の診断・統計マニュアル』高橋三郎・大野裕監訳、医学書院、2014

[5]『DSM-5』（日本語訳）pp.677~699.

うなDSM-5における説明はただマゾヒズム及びサディズムの表面的な症状について述べただけのものであり、症状の奥にあるサディストおよびマゾヒストの精神の本質的な在り様にまで迫ってはいない。そこで次にフロイトによるマゾヒズム及びサディズムに関する議論を考察してみたい。

フロイトは『マゾヒズムのエコノミー問題』（1924）[6]においてマゾヒズム及びサディズムについて興味深い考察を行っているので、ここではこの論考を中心にこの問題について考えてみたい。この重要な論文の中でフロイトはマゾヒズムという当惑すべき現象に関して最も完全と思われる説明を与えている。それ以前にもフロイトは『性の理論に関する三つのエッセイ』（1905）、『本能とその変化』（1915）及び『子供が打たれる』（1919）などにおいてマゾヒズムについて論じているが、これらの考察においてマゾヒズムはそれに先立つサディズムからの派生物としてのみ取り扱われ、原初的なものとしてのマゾヒズム（primary masochism）などは認められていなかった。しかし、『快感原則の彼岸』（1920）における「死の欲動」の導入に伴って、原初的マゾヒズムなるものの可能性が考えられるようになり、『マゾヒズムのエコノミー問題』においては原初的マゾヒズムの存在は確実なものとみなされ、それは主に、この論文の一年ほど前に出版された『自我とエス』（1923）において考察された生の欲動と死の欲動の融合（fusion）と分離（defusion）にもとづいて説明されている。そしてさらにこの原初的あるいは性的（性欲刺激的、色情的）マゾヒズム（erotogenic masochism）から派生するものとして女性的マゾヒズム（feminine masochism）と道徳的マゾヒズム（moral masochism）が考えられている。とくに後者においては罪の感情や良心のはたらきとの関連も考察される。

人間の欲動的生活におけるマゾヒズム的傾向の存在はエコノミー的観点から見れば全くの謎である。もし心的過程が快感原則によって支配されているなら、人は不快を避け、快感を得ようとするはずであり、マゾヒズムの存在は理解不可能なものとなる。もし痛みや不快が目標とされるなら、快感原則は麻痺してしまう。マゾヒズムとは人間にとって危険なものではないのか。そこで、フロイトはマゾヒズム問題の考察を快感原則と死の欲動およびエロス的（リビドー的）生の欲動との関係の考察に基づいて進めてゆく。[7]

ところで、マゾヒズムは三つの形態を取って現れる。即ち、性的興奮の状態（性的マゾヒズム）として、女性的本性の表現（女性的マゾヒズム）として、また行動の規範（道徳的マゾヒズ

---

[6] The Economic Problem of Masochism (Das Ökonomische Problem des Masochismus), The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud, Volume XIX, The Hogarth Press and the Institute of Psycho-Analysis, London, 1953, pp.155~170,（英語訳）

[7] ここでは死の欲動に伴うニルヴァーナ原則、リビドーの要求を表現する快感原則、そして外界からの影響を表現する現実原則の区別にも注意しておく必要がある。

ム）として。そして最初の、痛みの中に快感を体験する性的マゾヒズムこそ他の二つのマゾヒズムの形態の根底にあるものである。また道徳的マゾヒズムはある意味において最も重要なものであり、ほとんどの場合、無意識にとどまる罪の意識として精神分析によって認められたものである。他方、女性的マゾヒズムは観察において最も到達しやすいものであり、また最も問題性の少ないものである。

まず女性的マゾヒズムはしばしば性的不能者でもあるような多くの男性マゾヒストにおいてみられるものである。彼らのファンタジーはマスターベーションの行為において終わるか、それともファンタジーそのものに性的満足を示すかである。そして現実の彼らの行為は完全に彼らのファンタジーに一致するものである。それは、例えば、猿ぐつわをされる、縛られる、ひどく叩かれる、鞭打たれる、虐待される、無条件の服従を強いられる、汚される、卑しめられる、去勢される（性的不能者とされる）といったものである。これらのファンタジーと行為において彼らは小さくて無力な子ども（あるいは幼児）、いたずらな子ども（naughty child）として扱われることを望んでいるとも解釈できるし、またこのことにおいてマゾヒストは女性的な立場におかれるともいえる。尚、これらの拷問においてマゾヒストが実際に身体的ダメージを受けることなどほとんどはない。その点はサディストの残忍さとは異なるところである。また、このようなマゾヒストのファンタジーの中では罪責感（sense of guilt）もまた明白に表現されている。彼は身に覚えのない、しかしまたこれらの拷問によって償われるべき罪を犯したのだと想定している。これはマゾヒズム的主題の皮相な合理化のようにも見えるが、その向こうには幼児期のマスターベーションとの関連があり、この罪という要因が道徳的マゾヒズムへの移行を提供するものである。また、このような女性的マゾヒズムもやはり性的マゾヒズム、即ち苦痛における性的快感に基礎を置くものである。

『性の理論に関する三つのエッセイ』においては、幼児期の身体的痛みと不快の刺激が性的欲動の刺激と結びつき、後に性的マゾヒズムの精神的構造を創りあげるのだと考えられた。しかし『マゾヒズムのエコノミー問題』において、フロイトはこのような説明ではマゾヒズムと欲動生活においてそれに対応するサディズムとの規則的で緊密な関係に光が当てられず不十分であるとした。そこでフロイトは生きた有機体の中でいつも作用している二つの欲動、即ちリビドー（エロス的欲動）と死あるいは破壊の欲動（タナトス）に立ち返ってマゾヒズムの起源を説明しようとする。死の欲動とは有機体を解体し無機物の安定性の状態にもたらそうとするものであり、リビドーとはこのような破壊的欲動を無害なものにするという役割を有しており、それを外界へと向けさせることによってこの役割は果たされるのである。このとき、この破壊的欲動は支配への欲動、力への意志となる。そしてこの欲動の一部は直接的に性機能に奉仕することとなり、そこで重要な役割を果たすこととなる。これが本来の意味でのサディズムである。また、この欲動の他

の一部は外界に向かうことはなく、上に述べられたような性的興奮に伴われながら、有機体の内部にとどまり、リビドーによってそこに拘束される。そして、ここにおいて根源的な性的マゾヒズムが認められるのである。

精神分析的に見れば二つの欲動は、様々な割合において、また非常に広い範囲にわたって融合、混交しており、純粋な生の欲動と死の欲動を見分けることができないほどである。少しばかり不正確な言い方になるが、原初的なサディズムとして有機体の中ではたらいている死の欲動はマゾヒズムと同一視できるとフロイトは考える。死の欲動の主要な部分が外界の対象へと向けられても、その残余として内部にとどまっているものが本来の意味での性的マゾヒズムであり、それはリビドーの構成要素となり、また自我をその対象とするものである。このようなマゾヒズムこそ生命にとって非常に重要な発達の過程における死の欲動とエロスの融合を示すものなのである。また、外部に向けられていた破壊の欲動、即ちサディズムが再び内部に向けられたとき二義的なマゾヒズムがつくり出され、根源的なマゾヒズムに付け加えられるのである。

性的マゾヒズムは発達のあらゆる段階においてリビドーに伴うものであり、そこからさまざまの心的衣を受け取る。トーテム・アニマル（象徴的な父）によって食べられてしまうことへの恐れは原初的な口唇期の構造に由来し、父（象徴的な父）によって打たれたいという望みは肛門サディズム期に由来し、去勢は男根期の沈殿物としてマゾヒストのファンタジーの中に入り込む。そして最後の性器期の構造から、女性性の特徴でもある性交させられ、出産させられるというファンタジー（例えばpeggingのファンタジー）が生み出される。また、マゾヒズムにおいて尻の果たす役割も理解しやすいものである。というのも、尻は肛門サディズム期において、口唇期における乳房、性器期におけるペニスのように、性的に好まれるものだからである。

第三の形態のマゾヒズム即ち道徳的マゾヒズムは特にセクシュアリティーとの関連が希薄であるという点において注目される。マゾヒストの他のすべての苦しみは彼が愛する人からもたらされるべきものであり、彼女または彼の命令において初めて耐えられるべきものである。しかし、道徳的マゾヒズムにおいてこのような限定は欠如している。苦しみそのものが重要なのであり、だれによってそれが命じられたのか、愛する人によってか、それとも全く関心のない人によってかは全く重要ではない。それは非人格的な力や状況そのものによってもたらされるものかもしれない。しかしこの場合、リビドーは埒外におかれ、再び内部へと向けられた破壊への欲動が自我に対して怒り狂っているだけなのだと説明してしまってよいのだろうか。自らに苦痛を課す彼らもまたマゾヒストと呼ばれる以上、このような行動の規範とエロティスム（erotisme）の間には何らかの関係性があるのではないだろうか。

ところで、極端なそして明らかに病的な道徳的マゾヒストにおいて分析家が認めざるを得ないものとは「無意識の」罪責感であり、精神分析的治療に対してその人が否定的な反応をすることがその徴候（sign）である。このような無意識の罪責感を満足させることこそ、彼がその疾病か

ら得られる最も大きな利益なのであり、彼は力の限り回復すまいと抵抗し、疾病の状態を手放さないのである。もろもろの神経症がもたらす苦しみこそが、マゾヒスト的傾向のある人にとって神経症であることを価値あるものとする要因である。しかし、あらゆる治療的努力も無駄でしかなかった神経症が、不幸で悲惨な結婚、全財産を失うこと、身体の重大な病気などを契機に消え去ってしまうことがあるのは示唆的なことである。このような場合、一つの形態の苦しみが他の形態の苦しみに取って代わられるのであり、重要なことは一定量の苦しみが保持されるということである。また、患者としての道徳的マゾヒストは多くの場合この無意識の罪責感を認めようとはしない。

ところで、良心（conscience）の機能を果たすものとは超自我（super-ego）であり、罪の意識とは自我（ego）と超自我の間の緊張関係であると考えられる。そして、自我が超自我の理想からの要求に応えられないとき、自我は不安の感情（良心の不安）によって反応する。しかし、超自我はなぜこのような要求的な役割を果たすのか。また、自我はなぜその理想と自らが異なるとき不安にさいなまれるのか。自我の機能とは超自我のうちに自らの従うべき模範を持ちながら、三つの審級（agency、Instanz、instance）、即ちエス（id）、自我、超自我をひとつにし、和解させることである。外界と同様にエスの代理人でもある超自我はエスのリビドー的衝動の最初の対象である父と母の自我への投影において成立する。この過程においてこれらの対象との関係性は脱性的なものとされ（desexualize）、直接の性目標から逸らされることになる。このようにしてオイディプス・コンプレックスは克服される。しかしこの時、超自我は投影された人物の本質的性格、即ち力、厳格さ、監視し罰しようとする傾向などを保持する。そして、自我への超自我の導入に伴う破壊への欲動とリビドー的欲動の分離によってこの厳格さは増大し、自我の中で良心としてはたらいている超自我はそれが委託されているところの自我に対して残酷、残忍で容赦のないものとなる。カントの定言命法こそこのようなオイディプス・コンプレックスの遺産相続人なのである。またエスのリビドー的欲動の対象であることをやめた後でも、良心としての超自我において働いている父と母の姿は現実の外界に存在している父と母の姿でもある。彼らの力のもとには過去と伝統の全ての影響力が潜んでおり、それは最も強く感じ取られるところの現実界の現れなのである。このようにしてオイディプス・コンプレックスの代理人たる超自我は外の現実界の代理ともなり、自我の努力の模範となるのである。

オイディプス・コンプレックスこそは歴史的に観て我々の個人的倫理観や道徳性の源泉なのである。しかし、子どもはその発達とともに父と母からは離れてゆき、超自我にとっての彼らの重要性は背景に退いてゆく。彼らに代わって教師や権威者、選ばれた模範的人物、社会的に認められた英雄などが新しいイマーゴ（幼児期に形成された愛する人の理想像）として登場するが、抵抗する力を身につけた自我によってはもはや投影される必要はない。しかし、父と母の力と姿に連なる最後のものは「運命の暗い力」であり、それを非人格的なものとみなすことのできる人は

ほとんどいない。それは世界を導くものとしての「ロゴスとアナンケー」「摂理と神」「神と自然」であり、それら究極的な力は神話的な意味における「父と母」の姿の再現なのであり、人は未だ自らのそれらとのリビドー的な結びつきを信じているのである。また死の恐怖も父と母に起源を持つこれらの暗い力から導き出されるものであり、我々にとって死の恐怖から逃れることはとても困難なことである。

そこで道徳的マゾヒズムの問題に戻るなら、道徳的マゾヒストは過度に道徳的禁止を受け、このような過度の道徳性を意識することなく特別に敏感な良心によって支配されているようである。このような無意識の道徳的緊張と道徳的マゾヒズムの違いとはどのようなものであろうか。それは前者においてはそれに自我が服従するところの超自我のサディズムに、後者においては、それが超自我からのものであれ、外部の父親的なものの力からであれ、罰せられることを求める自我のマゾヒズムに強調が置かれているということである。そしてどちらの場合にも、罰することと苦しむことによってはじめて満たされる欲求が存在する。また、超自我のサディズムは多くの場合ぎらぎらするほど意識されているのに対し、自我のマゾヒズム的傾向は基本的に主体からは隠され、その人の行動から推測されるだけである。

無意識の罪責感とはまさに父親的な力によって罰せられることへの欲求を意味するものであろう。ファンタジーの中でよくあらわれてくる父に打たれたいという願望は、父と受動的な(即ち女性的な)性的関係を持ちたいという願望に近いものであり、そしてこの願望が退行的に歪曲されたものである。ここから道徳的マゾヒズムの隠された意味が明らかとなる。良心と道徳性とは、オイディプス・コンプレックスの克服と脱性化（desexualization）によって成立するものであるが、しかし道徳的マゾヒズムにおいて道徳性は再び性的なものとされ（sexualize）、オイディプス・コンプレックスが再生する。道徳性はオイディプス・コンプレックスへと退行するのである。マゾヒストの中にも倫理観は残っているのかもしれないが、しかし彼の良心の大部分はマゾヒズムの中に解消してしまい、マゾヒストは再び罪深い行いをしたいという誘惑にかられる。そして、彼はサディスティックな良心の叱責によって、または運命の父親的な偉大な力によって折檻されるのである。このような罰を受けるためマゾヒストは時として賢明とはいえないこと、不利益なことをし、現実の世界において彼に開かれていたはずの未来の展望を壊し、ついには彼自身の現実の存在さえも破壊してしまうのである。

また、本能的欲動の文化的抑圧によって主体の破壊的欲動の実生活の中での実行が抑制されるとき、サディズムは自己自身に向かう。この自己自身へと向き変わった破壊的欲動が自我におけるマゾヒズムを強化するのである。良心という現象は、外界から回帰した破壊的欲動が如何なる変形も被ることなく超自我によって受け取られ、その自我に対するサディズムが強化されることを示している。こうして超自我のサディズムは自我のマゾヒズムを補完するのである。また、このような仕方で本能的欲動の抑圧がしばしばあるいはほとんどすべての場合において罪責感を生

み、他者への攻撃を思いとどまることにおいて彼の良心がますます厳格で敏感なものとなることが理解されるのである。一般に倫理的要求が先にあり、それによって本能的欲動の放棄がなされると考えられるが、これでは倫理観の起源が何も説明されていない。最初に外界からの力によって本能的欲動の放棄がなされること、これが倫理観の起源なのである。それは良心において表現され、さらなる本能的欲動の放棄を要求してくるものなのである。道徳的マゾヒズムとは本能的欲動の融合を示す証拠でもある。それは死の欲動にその起源を有し、また、外部へと向けられそこなった破壊欲動に対応するものであるがゆえに、危険なものなのである。しかし、他方これはエロスを構成するものとしての重要な意味をも有する。主体による自己破壊もまたリビドーの満足を必ず伴うものなのである。

以上のように、フロイトはサディズムとマゾヒズムを一つの主体の中で相補完しあうものとして描いている。これは彼の豊富な臨床体験に基づいて得られた知見であろう。しかし、このような精神分析において理解されたサディズムとマゾヒズムとサドとマゾッホという二人の作家において描かれたそれぞれの世界は全く異なるものであることを示したのがドゥルーズである。このドゥルーズのマゾヒズム論及びサディズム論[8]を検討していくことを次の課題としておきたい。

[8] Gilles Deleuze, *Presentation de Sacher-Masoch*, 1967, Les Editions de Minuit